

オホーツクの二古謡

中村喜和

天保九年十一月下旬(西暦一八三九年一月上旬)のこと、越中富山古寺町能登屋兵右衛門の持船で六百五十石積みの長者丸が松前箱館を経て江戸にむかう途中、寄航した仙台唐丹湊の沖合から西の強風に吹き放たれた。長者丸には船頭平四郎以下十人の者が乗り組んでいた。この遭難から四年半後の天保十四年五月下旬(一八四三年六月)に、生き残った六名がロシア船によって南千島エトロフへ送還された。これら漂流民の体験と見聞を記述したものが憂天生古賀謹一郎手録『蕃談』と金沢藩士遠藤高環編『時規物語』であることはよく知られている。最近では井伏鱒二氏の小説『漂流民宇三郎』が長者丸乗組員のオデッセイアを江湖の読者に想起せしめた。

以下に紹介しようとするのは、越中の船乗りたちがオホーツクで記憶にとどめ母国にもたらしたロシア歌謡のひとつである。まず話の順序として、彼らの漂流と漂泊のあとをざっと簡潔書

き整理しておく必要がある。(日付けは『時規物語』による。)

天保九年十一月二十三日(西暦一八三九年一月上旬) 午前

十時ごろから大西風に吹き流される。以後、しばしば嵐におそわれ、飢渴になやまされながら、西太平洋を漂流。

天保十年一月―四月(二月―五月) 乗組員のうち五三郎、

善右衛門が病死し、金六が投身自殺をとげる。

同年四月二十四日(六月五日) 米国の捕鯨船ジェームズ・

ドーヴァ号に救助される。しかしその後も鯨を追う米国船数隻に分乗して洋上にとどまる。

同年九月(十月) 米船逐次ハワイ諸島(当時はサンドウィ

チ諸島として知られた)に寄航。日本漂流民も上陸して再会。

同年十月下旬(十二月上旬) 船頭平四郎病死。

天保十一年七月(一八四〇年八月) 中国經由の帰国は阿片

戦争のため実現困難となり、六人の日本人は英国の商船に便乗してハワイ出帆、カムチャツカにむかう。

同年九月上旬(九月下旬) カムチャツカ半島東岸ペトロバ

ヴロフスク着。

天保十二年六月上旬(一八四一年七月下旬) ペトロバヴロ

フスク出帆、オホーツクにむかう。七左衛門のみ病気のため約二十日おくれる。

同年七月上旬(八月下旬) オホーツク着。

天保十三年七月中旬(一八四二年八月下旬) オホーツク出

帆、帰国の便を得るべく北米アラスカ(当時ロシア領)のシトカにむかう。

天保十四年三月下旬(一八四三年四月下旬) シトカを出帆し、日本にむかう。

同年五月二十三日(六月二十日) 八左衛門、太三郎、六兵衛、七左衛門、次郎吉、金藏の六名、エトロフ着。

幸運な六名の帰還者が江戸に到着したのは天保十四年閏九月の中旬であったが、彼らはそのままここに留め置かれ、弘化年間に一時六ヵ月ほど帰郷を許されたものの、ふたたび呼び出されて、結局嘉永元年(一八四八年)九月まで江戸で軟禁生活を送った。この間一再ならず勘定所に召し出されて取調べを受けたことは言うまでもない。最初の滞府中に七左衛門が、二度目には八左衛門が病いにたおれた。太三郎ら四名の漂流民が最終的に生まれ故郷に帰ることができたのはエトロフに着いてから六年四ヵ月ぶりのことで、皮肉なことに江戸での軟禁は彼らが日本をはなれていた期間より長かった。

帰還者のなかでは治郎吉が最も才幹にめぐまれていたらしく、弘化元年には水戸の藩邸に招かれて海外事情を聴取されたほか、その翌年ごろには当時儒者として知られた古賀謹一郎をはじめとする知識人のグループにしばしば呼び出されて、外国人との接触、異国での観察を通じて得た知識を問いただされた。この治郎吉からの聞き書をまとめたものが、「……嗚呼読万巻書、行万里路、豈非吾輩宿昔大願邪……今五州列国、雲擾虎争、称帝称王、強弱相併、罔有寧晏、而我邦独几然於大洋中、毫無所

交渉、且二百年来、沐郅隆之聖化、万姓熙々、止知歌咏太平、不復知敗乱覆滅之為何事、安土樂業、爰護仙境、云々」の自序をもつ『蕃談』(あるいは『蕃譚』)である。この序文には嘉永二年の日付けが附されているが、三巻よりなる本文はそれより早く、おそらく次郎吉に訊問を繰り返す過程で、諸本にもとづく考証を加えて、成立していったものとされている。

一方、治郎吉らが国元に帰った翌年の嘉永二年、加賀藩主前田斉泰の命によって算用場奉行遠藤高環らが編纂したものが十巻と一附録からなる『時規物語』である。巻数からいっても収録された挿絵・図表からいっても、これは『蕃談』をはるかに凌駕している。その編集態度は、次のような序言から明確にうかがわれる。「……此編稿を起すはじめ、四箇の漂流民をして、各々席を別て、其流難の顛末を説しめ、且問、且記す。記し畢て彼此を対校するに、各異同あり、各得失あり、異同得失相半するあり。ここにおいて席を同くして、相弁駁せしむるに、はじめて其実を得るものあり。各固執して相いれず、終に其帰趣を得ざるものあり……帰国の後都下の人士に聞くところを混同し、遂に自誣て非をかざり、妄誕驕誇なるものあり、一人の口頭前後両般にして、其杜撰の多き、蕃譚にとくところの如きものあり……此編大体の見るにたるものなく、小説の談柄となすべきなし。実に一部無用の書といふべし。しかれども、微意のあるところ、無用の無用たるを知て後、無用の有用たるを知るにあり。これ此編を讀むむねとなす」と。

なお『時規物語』の名は、シトカ駐在の露米会社支配人が漂

流民の領主に贈った掛け時計に由来している。

(1) 『時規物語』および『蕃談』からの引用はとくにこと
わらぬ限り、すべて『日本庶民生活史料集成』第五巻、三
一書房、一九六八年、に収められたテクストによる。『蕃
談』の底本は東洋文庫所蔵本であり、『時規物語』のそれ
は前田家尊経閣文庫本である。また、校訂・解説者は池田
晴氏である。

(2) 前掲書、二三九ページ、ならびに、室賀信夫・矢守一
彦共訳『蕃談——漂流の記録1』、平凡社、一九六五年、
の解説(矢守氏)、二七ページ。

二

越中漂民が極東ロシアで聞き覚えた俗謡は『蕃談』と『時規
物語』の双方にしろされている。まず『蕃談』巻之二のうち
「遊嬉」の項にみえる記事は次のとおりである。

羅刹ノ俗曲ニ「センゲ」「ゴロス」ノ二調アリ。其「ゴロ
ス」曲ニ、左ノ如キ詞アリ。聞年既ニ久ク、毎句訳シ難シ。
且歌セヨ
ゴボレラ、ヤメローモ、何ソ薄情ノ甚シキ
ネヤーチユベ、ニ一ツボンダラーブ、オジメウロ
ニ任ケ此「ベストル」銃ニテ、可要亦可憐
チゲ、ペーベストレツテ、シトフリユーベラ、ヤーチユベ、
ホルストレツテ、ゴロチモヨ、エーヒネヤーチユベ、
可要亦可憐、徐ト儼ト(1)
シトフリユーベラ、ヤーチユベ
是彼士男女相悦ノ辞ニシテ、較淫哇ニ流レ、子夜異歌共云

ベキ也。酒酣ニシテ、妖艶ノ番婦、転喉一発スレハ衆賓皆
之ニ和ス。洋琴提琴ヲ彈シ、舞者ハ両手ヲ以テ腰ヲ挟ミ舞
フ。歩武ノ音ヲ以テ、節奏ニ合ス。旋転甚巧ニシテ亦奇観
トス。

「センゲ」とは英語の song、「ゴロス」はロシア語 *годоc*
—すなわち、文字どおりには「声」を指す。その含意につい
てはのちに述べよう。

『時規物語』ではおなじ歌が「魯西亜領ヲホツカ」と題され
た巻之四にあげられている。すなわち、

「ゴロス」と申候て、歌の文句有之、踊の時又は常にもう
たひ申候。其辞は「コボレラ。ヤメロモ後ほど、ワシとおま後ほど、
セリデシノモ。スワヤモ。イシネ。ヤーテビヤ。ニツボン
ダラウ。ソスレスワヤ。ストロノ。ニツソスレ。スワヤ。
むづかしい。持てゆけ。山の事。武尺計の銃砲。
ストロノ。ラジメウルチケ。ハスドレーテ。ポロストレッ
テ。ゴロチモヨ。チトーリウベリヤ。ヤーチビヤ」と申事
にふしを付申候。

内容が比較的到尾一貫している後者の片仮名転写によって
ロシア語の歌の言葉を復元すれば次のようになるであろう。

- Говорил я милomu
- Сердечному своему
- Если я тебе не по нраву
- Сошли в свою сторону
- Не сошли в свою сторону

Возьми в ручки пистолет
 Пострели ты грудь мою
 Что любила я тебя.

この歌は女から男に呼びかけているもので、その大意は、(a)いとしい人にわたしは告げた、(b)わたしの愛するあの人に、(c)もしもわたしが気に召さぬなら、(d)古里にかえしてほしい、(e)いや、古里にかえさずに、(f)ピストルを手にとつて、(g)わたしの胸をうっておくれ、(h)あなたを愛していたことを、である。

これに対して『蕃談』の歌詞の配列は a b c f h g e h である。次郎吉ひとりの記憶にたよつた『蕃談』と、次郎吉をふくむ四人の帰還民の話を厳密につき合わせた『時規物語』では、正確さの点で明瞭に優劣の差があることはやむをえない。とはいへ、「妖艶ノ番婦、転喉一発スレハ」以下、歌唱の情景を聞き出し、書き留めることを怠らなかつたことは江戸の記録者の功績とみとめなければなるまい。

a から h まで歌詞が双方の転写で八行に分けられることは、この歌が各四行からなる二節の歌謡と受けとられていたことを示しているらしい。おそらく越中の漂流民たちはこの歌の言葉をもロデイといつしよに覚えていたのであつて、江戸や金沢の学者たちのまえでうたつてみせたものと想像される。

各行の意味から判断して、ロシア語の本歌における行の配列は

- [I] a b c d
- [II] e f g ○

- [III] ○ ○ ○ h
- あざは
- [I] a b ○ ○
- [II] ○ ○ c d
- [III] e f g ○
- [IV] ○ ○ ○ h

となつていたのであるまいか。○は日本語転記で欠けている部分である。このような推理の根拠は、さらにのちに述べるであらう。

この歌の片仮名への転写にあらわれているロシア語のいちじるしい特徴は、アクセントのない o をそのまま [o] と発音するいわゆるオーカニエの現象である。すなわち、*ゴボレ*ラ^h「*Гобрида*」、*メロ*モ^h「*Милому*」、*スト*ロ^h「*Стропу*」、*ソ*スレ^h「*Сошли*」、*ラ*ジメ^h「*Возьми*」など。例外、*ス*ワヤモ^h「*Своему*」。ただし、ロシアの歌謡では語のアクセントが特殊な位置にくることが稀ではない。この場合、*Милому*、*Возьми* と発音された可能性も大きい。

ロシア語の発音を片仮名に移すさいのおもな特徴は次のとおり。

- 一、アクセントの有無に関係なく *и* がイ段ではなくエ段で転写されていること。*ゴボレ*ラ^h「*Гобрида*」、*メロ*モ^h「*Милому*」、*ソ*スレ^h「*Сошли*」、*オ*ジメ^h「*Возьми*」、*ル*チケ^h「*Ручки*」
- 二、アクセントの有無にかかわらず *у* がウ段ではなくオ段で転写されていること。*メロ*モ^h「*Милому*」、*セ*リデシ^h「*Сердеч-*

Номг' स्वायके / своему' ступно / стороны' ерочи / гн-
 иь

三、アクセントをもつもの転写は一定しないこと。スワヤ
 <Срѡвъ' е, и / мѡвъ

漂流民たちが歌の内容を逐語的には理解していなかったこと
 は、彼らが自ら告白しているとおりでである。しかし「是彼土男
 女相悦ノ辞ニシテ、較淫哇ニ流レ、子夜呉歌共云ベキ也」とい
 う解説はすこしものをはずれていない。傍注のかたちでつけら
 れた訳語をみても、Говорина (物いふ事、且談ゼヨ)、в рѣбѣ
 (わしとおまへ、徐卜儂ト)、пистолет (式尺計の鉄炮、「ベ
 ストル」銃)、любка (かわいがる、可愛亦可憐) など、日常
 生活のなかで使用頻度の高い語についてはひどい誤解がなかっ
 たことがわかる。『時規物語』巻之九は露・英・ハワイ土語の
 事項別対照辞書であるが、そこにはロシア語の語彙が短文を合
 わせて八百以上収められていることも付け加えておきたい。

(1) このテキストを、京都大学図書館所蔵本に基づくとい
 う室賀・矢守両氏の前掲書にかかげられたテキストと比較
 すれば、音の清濁の点で若干の異同がある。「ゴボレラ」
 ↓「ゴボレラ」、「オジメウロチゲ」↓「オジメウロチケ」、
 「ペーベストレット」↓「ペーベストレット」、「ボルスト
 レット」↓「ボルストレット」など。

三

「ゴボレラ、ヤメロモ……」の歌が『時規物語』では巻之四、

つまりオホーツクでの滞在について述べた章に含まれているこ
 とはすでにふれたとおりである。六人の越中民はここに西暦一
 八四一年八月下旬から翌年のおなじ時期までとどまったのであ
 った。オホーツクはすなわちオホーツク海に面した町、極東地
 方におけるロシアの行政上の中心、なかならず、ロシア本土・
 シベリアとカムチャトカやアラスカを結ぶ交通上の要衝であっ
 た。太三郎、次郎吉らより半世紀以前にここをおとすれた伊勢
 の漂流民大黒屋光太夫はこの町を、「東南諸方海船輻湊の埠頭
 にて頗る繁盛の地なり」と描写している。一八六三年の調査で
 は二三人の人口を有していた。

しかし、「踊の時又は常にもうたひ申候」という『時規物語』
 の説明をみれば、これは当時の流行歌とも考えられ、カムチャ
 トカやシトカのロシア人のあいだでも、おなじようにうたわれ
 ていたという可能性を否定することはできないであろう。ちな
 みに『蕃談』ではこの歌のあとに、ただちに次のような一節が
 つづいているのである。

「セツカ」ノ舞姫ハ、短袖ノ羅衣ヲ披キ、手ニ汗巾様ノ物
 ヲ執リ、白布ニテ首ヲ帙ス。羅衣虚薄ニシテ、肌膚ヲ逗視
 ス。

ところでロシア本国では、十九世紀の中葉、「ゴボレラ、ヤ
 メロモ……」とごく近似した内容をもつ歌謡が少なくとも二例、
 民謡集に収録されている。まず第一はペテルブルグ一八四七年
 刊行のM・ベルナルドによるピアノ伴奏つき民謡集で、その内
 容は次のとおりである。(曲は楽譜I、ただしピアノ伴奏部分

楽譜 I

Andante

Во сле-зах я за сы па- ла дру- жка

ви-де- ла во сне дру- жка ви-де-ла во сне

ぎのさへ。)

Во слезах я засыпала
Дружка видела во сне
Я проснувшись воздохнула
Закипела кровь во мне
Если я тебе по нраву
Прекрати ты жизнь мою
Возьми в ручки пистолетик
Прострели мне белую грудь
Я навеки буду слепой
От любви от твоей:
И когда будешь на гробе
На гроб наплись напиши
.....

「泣きながら眠つてゐる」といふ第一行がこの歌の題である。右のうたは第二、四、六行目に行末にこの注記を付けてある。すなわきソフリンとてして繰返したわけてつた。

第二は一八六六年に出た作曲家として有名なM・ハラーキレフのピアノ伴奏つき独唱

用ロシア民謡集である。これは彼が一八六〇年ヴォルガ沿岸地方の民謡調査旅行の途中でニージネコロド県(現コーリキイ地方)とリヤザン県で採譜したものである。歌詞を書き留めたのは詩人のH・シチャルビーナで、第一ヴァリアントがニージネコロド県のもの、第二ヴァリアントがリヤザン県のものである。(曲は楽譜II)

《Что на свете преежестоком》

ソフリン集第1巻第11頁

1. И что на свете преежестоком
Преежестокая любовь!
Остывает, покидает
Здесь в несчастной стороне.
2. Ах на несчастной [на] стороне[к]е
Здесь правдынка не растёт,
Ковыль-травинышка не растёт,
Здесь цветочки не цветут.
3. Ах говорила я милёму,
Любезному своему:
— Если я тебе по нраву,
Возьми замуж за себя.
4. Ах если я тебе по нраву,
Возьми замуж за себя,
Если тебе не по нраву,
Сошли на сву сторону,

楽譜 II

Медленно *p*

И что на све-те пре- же- сто- ком
 пре- же-сто-ка- я лю- бовь о став-ля-ет, по - ки-
 да - ет здесь в не-счаст-ной сто - ро - не.

ことと無関係ではあるまい。「コロス」は歌一般ではなく、ある特定の種類の歌、抒情的な民謡を指したものとと思われる。ロシア民謡として知られる曲のなかには、その歌詞が有名無名の詩人の作品である場合が意外に多いが、「コロレラ、ヤメロモ……」の成立に関しては、またソヴェトの学界でも定説がないようである。

注目すべきことは、ベルナルドの「泣きながら眠りについて」とバラキレフの「つら

い浮き世で」は歌詞の面では部分的に酷似しているにもかかわらず、曲は全く異っていることである。オホーツクでうたわれた「コロレラ、ヤメロモ……」が筆者の想定したように各節四行からなるものであれば、バラキレフの譜でしかうたえない。あるいはいずれとも異なる第三の旋律をもっていたかもしれないが、今はそれをたしかめるすべがない。

- (1) 亀井高孝校訂『北樺開略』三秀舎、一九三七、七四ページ。
- (2) A. П. Окладников (ред.), *История Якутии*, т. 2, Л. 1968, стр. 415.
- (3) М. Вегнарк. *Лесни якутского народа, собранные и аннотированные для печати с аккомпанементом на ф-но*, СПб., 1847, стр. 4.
- (4) М. Валакирев *Сборник русских народных песен*. СПб., 1866. 307頁は一九五七年に Е. Киппович 校訂の復刻版 E. Гиппиус. *М. Валакирев Русские народные песни*……М., 1957, стр. 91—93. にあった。ベルナルドらびにバラキレフの民謡集について教示を与えられたのはソヴェトの研究者の B. M. Дубровворрисский氏である。同氏はまた「コロレラ、ヤメロモ……」の本歌の復元に関して貴重な示唆を提供された。正確に言えば、本稿はドubrovorrisский氏と筆者の共同研究ともいえるべきものである。
- (5) 「プロチャージナヤ」については、森田稔氏「民謡研

究家 И. И. Земцовский について、『スラヴ学論集』第二号、一九六八、のなかの解説参照。

(6) E. Пиняус, *op. cit.*, стр. 341.

(一九六九・八・六)(一橋大学助教授)